

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

狩猟文化からみた満州東北部住民の系譜： 15世紀から17世紀

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5528

HUNTING TRADITION OF THE PEOPLES OF THE NORTH-EASTERN MANCHURIA

—FROM 15th CENTURY TO 17th CENTURY—

Shiro Sasaki
National Museum of Ethnology

狩猟文化からみた満州東北部住民の系譜 —15 世紀から 17 世紀—

佐々木 史 郎
国立民族学博物館

序

本報告は15、16世紀の漢籍にみられる「兀狄哈」(Udikai)と呼ばれる人々に見られた熊と人との交わりに関する伝承(獸婚譚)を一つの契機として、東北満州の住民の北方狩猟民的な文化要素の系譜を考察することを試みるものである。

『李朝実録』世宗21年(1438年)7月戊申の条

「吾都里(註:建州女直を指す)指揮馬加湯来言、具州于知介(註:兀狄哈と同義)等喧伝云、有一人捕大魚于江、剖腹視之、孕二兒、其人乃與里人往見、兒皆已死。又言、于知介之俗、女皆佩鈴。歲戊午(註:世宗20年)五月、有女三人因採樺入山、一女還家、二女不還、是年十一月、獵者入山捕熊、聞木空中有鈴聲、折木視之、二女皆携兒。問其由、答云、去五月、因採樺到山間迷路、不得還家、仍雄熊脅與交、各生兒子。其兒面半似熊形。其人殺其兒、率二女而還。」(註は増井寛也氏による。下線は筆者が施した。)

この記述の中で獸婚譚に関するのは下線の部分である。それを現代語に訳せば、次のようになる。

また言うには、兀狄哈の習俗で、女性は皆鈴をつけていると言う。戊午の年(世宗20年西暦1437年)の5月(陰暦)、3人の娘が白樺の樹皮をとり山に入った。一人は無事に家に帰ったが、残りの二人は帰らなかった。その年の11月、ある狩人がその山に入り、熊を仕止めた。すると、大木の空洞から鈴の音が聞こえるので、木を倒して覗いてみたところ、二人の女がそれぞれ子供を抱いていた。狩人が事情を尋ねると、去る5月に白樺皮をとり山に入ったところ、路に迷ってしまって家に帰れなくなった。すると、雄の熊がやってきて交わることを強制したため、子供が生まれてしまった、と答えた。その子供の顔は半ば熊に似ていた。狩人はその子供を殺し、二人の娘を連れて帰った。

1. 「兀狄哈」の種類と居住地

ここで言われる「具州」とは河内良弘氏によれば、牡丹江(またはフルハ川、松花江の支流の一つ)上流の辺りを指すという。その住民は漢人から、遼東を中心とした地域にいた「建州女直」、松花江中、上流域に広く勢力をのびた「海西女直」と区別され、最も奥地の未開の女直という意味を込めて「野人女直」と

狄哈らと朝鮮遠征について共同行動をとっていることから、松花江とアムール川の合流地点にまで兀狄哈と呼ばれる集団が分布していたらしい。

兀狄哈とはそれら下位集団の連合体であったと考えられている。そのことは、資料によっては「三姓兀狄哈」、「五姓兀狄哈」、「七姓兀狄哈」などいかにも同姓集団である「氏族」の連合体であるかの表現がしばしばなされていることに端的に現れている。河内氏は兀狄哈が氏族連合のようなものを形成していたのは、建州女直、海西女直らの比較的優勢な女直や朝鮮などに囲まれ、自集団を防衛する必要に迫られていたからではないかと説明している。

彼らを直接とりまくのは同じく女直と呼ばれた人々である。中国の言い方では「建州女直」、「海西女直」そして他の「野人女直」であるが、『李朝実録』では異なり、「斡朶里」、「忽刺温」、「兀良哈」などと呼ばれている。このうち、「斡朶里」は Odoli の当て字で建州左衛人を、「忽刺温」は Hulun のことで海西女直を指すといわれる。「兀良哈」は Orangkhai と読み、その名称は日本でも知られていた。

ちなみに、「斡朶里」Odoli とは清朝の皇帝家である「愛新覺羅氏」Aisin Gyoro hala 発祥の地とされるところで、15世紀にこの名で呼ばれた人々は後にヌルハチの指導のもとに清朝の基礎を築く人々の祖先であるといわれる。「兀良哈」Orangkhai は満州語の「ワルカ」Warka という呼称と同義とされ、沿海州南部から烏蘇里江流域にかけて居住していた人々である。15世紀当時は金朝の子孫と思われていた斡朶里と違って「野人平民」とみなされていた。彼らは17世紀初期には清の太祖ヌルハチの徙民政策によってその多くが満州八旗に組み込まれた。

「忽刺温」Hulun すなわち「海西女直」は15世紀から16世紀にかけての時代には女真の中で最も有力であり、その勢力は松花江流域を中心に広大な範囲に及んだ。その中には兀狄哈を初めとする野人女直らも含まれていたが、彼ら自身「忽刺温兀狄哈」Hulun udikai と呼ばれるなど、朝鮮からは兀狄哈の仲間と考えられていた節もある。また、以下でも説明するように、生業面でも忽刺温と兀狄哈は類似していた。彼らに対しては斡朶里、兀狄哈らが姻戚関係を結ぶことによって力を保持しようとさえした。しかし、17世紀にはヌルハチに率いられた斡朶里すなわち建州女直に破れ、その配下に入ることになる。

2. 15、16世紀に於ける「兀狄哈」の系譜

朝鮮の資料に登場する兀狄哈は恐らく『金史』に登場する「兀的改」の系統の呼称である。呼称の系譜と人間集団の系譜が一致するとは限らないが、何らかのつながりを認めざるを得ない。古い時代には資料が乏しいことから確実なことはいえないが、1. のように14、15世紀の兀狄哈にはいくつかの内部集団が認められた。その系譜をたどれば次のようになる。

河内良弘氏の研究によれば、「兀狄哈」は明代初期（14世紀末期から15世紀初期）には特に「嫌真兀狄哈」Hejin Udikai とよばれていた。「嫌真」Hejin というのは「赫哲」などと同じく、川筋の下流方面を指す言葉であるといわれる。「嫌真兀狄哈」には当初3人の頭目がいたが、その内の一人が後に「尼麻車兀狄哈」と呼ばれる集団の頭目の祖先になることから、嫌真兀狄哈と尼麻車兀狄哈とは系譜的につながっていた。その「尼麻車」Nimacha の名前は15、16世紀を通じて資料に頻繁に現れ、牡丹江流域を中心とした「兀狄哈」集団の中心的存在であった。

彼らの中には16世紀末期の動乱の中で朝鮮方面に移住するものもいたが、同じ地域に「ニマチャ路」Nimacha golo（「路」golo とは清初の行政単位の一つ、「部」aiman の下）として勢力を持ち続ける。当初海西女直の

Hulun gurun に従ったが、後ヌルハチの軍門に下り、八旗の一員となる。そして「尼麻車姓」Nimacha hala（「姓」hala は満州語で氏族を表す）として満州人の中に存続し、その中から清朝で要職につくものが現れている。

松花江流域にいたとされる都骨兀狄哈 Tokol Udikai はその居住地から清代初めの「ウエジ部」Weji i aiman の「フルハ路」Hūrha golo または「フルハ部」Hūrha i aiman につながるのではないかとというのが河内氏の見方である。「都骨」というのは朝鮮語の音で tokol という音に近いと思われるが、清代のフルハ部の hala（氏族）の一つに Toholo hala というのがある。両者が同じ集団を指すとするならば、清代のフルハ部の祖先の一部が牡丹江流域の住民らとともに「兀狄哈」Udikai と呼ばれていたことになる。Toholo hala も17世紀の終わりまでには満州八旗に参加し、満州人の hala の一つに数えられている。

南突兀狄哈 Namdulu Udikai はその居住地から清初の Weji i aiman（ウエジ部）の「ナムドゥル路」Namdulu golo と呼ばれた地域の住民に連なるといわれる。恐らく音からいっても「南突」は Namdulu を表すのではないかと推測できる。また、兀末車 Ormicha 兀狄哈はその居住地より、同じ Weji i aiman の Suifun golo（スイフン路）の祖先ではないかといわれる。

このように兀狄哈（または阿速江衛）を構成した諸集団のその後の系譜をたどると、これらは基本的には明末清初に建州女直らから「ウエジ部」Weji i aiman と呼ばれた人々に連なることが分かる（フルハは独立した部 aiman であると記述される場合と、ウエジ部の一つの路 golo であるとされる場合とがあった）。「ウエジ」Weji とは満州語で森林、密林を意味し、「兀狄哈」Udikai の udi は Weji と同じ言葉の異形であるといわれる。したがって、清初の「ウエジ部」Weji i aiman は「兀狄哈」Udikai という呼称を受け継いだものであるといえる。

彼らは沿海州南部から烏蘇里江にかけて広がっていたワルカ部 Warka とともに16世紀末期から清の太祖ヌルハチの征討によって彼に帰順し、満州八旗の一員にされる。そして、各下位集団は「満州」という民族を構成する氏族またはそれに代わる社会集団となる。ただし都骨 Tokol が Toholo hala であるとする、このグループの中には順治年間（1643年～1661年）まで八旗に加わらず、毛皮貢納民として留まるものもいた。彼らは康熙初期（1670年代）の「新満州八旗」の編成時によりやく完全に八旗の一員となることから、後々まで「新満州」Ice manju と呼ばれて区別された。

3. 兀狄哈の生業形態

兀狄哈の基本的な生業は家畜をとまなう農業であったといわれる。例えば、『李朝実録』（成宗実録）によれば、李朝が成宗22年（1490年）に国境地帯で跳梁する尼麻車兀狄哈を討伐したときには戸数は約400戸ほど、家屋は固定家屋で屋根には瓦を用いず、茅葺きであるが、「幹朶里」Odoli（建州女直）や「兀良哈」Orangkhai よりも清潔で、米などが豊富にあり、豊かであると記されている。そして、田地も肥沃で、犬、豚、鶏、鴨などの家畜、家禽も多かったという。征討軍は貯蔵されていた穀類で士卒、兵馬を養い、隠匿されていた服、織物などを奪い取って分配した。

これから、彼らが漢人らのように穀類を作り、家畜、家禽を飼って生計を立てていたことが知れる。米が豊富にあるとあるが、恐らくそれは交易または略奪によって手に入れたものであろう。彼らの耕作、牧畜がどのような形態であったかについては具体的な記録はないが、その東方の北流松花江流域にいたといわれる「忽刺温兀狄哈兀者衛人」（河内氏は「兀者衛」が現在の吉林市の近くにあったとするが、三田村泰助氏など

は松花江、アムール川合流地点あたりと推測する)は基本的には牛馬を放し飼いにしていたといわれる。ただし騎乗用の馬には藟豆を餌に与え、それがないときは鹿の肉の切り身や川魚を与えていた。牡丹江、綏芬河、松花江下流域の兀狄哈でも状況は似たものであったろうと推測される。

また、各河川の流域全体が肥沃であったというわけではなく、例えば、尼麻車兀狄哈のいた牡丹江上流の東京城付近では土地が肥沃であったが、そのすぐ北には岩だらけの無人の荒野が広がるというように、肥沃な河谷平野は河沿いに不連続に点在する。したがって、各兀狄哈集団は数日の行程のところに分散して割拠することになったと考えられる。

兀狄哈の生業の基本は農耕と牧畜であったが、その特産物には当然狩猟、漁撈産品も多い。兀狄哈に関する記録には狩猟に関する情報はないが、兀者衛人の特産物に鹿、熊、虎、豹、貂などが記載されているところから、兀狄哈でも狩猟活動が盛んで、同様の産物がとれたと考えられる。

4. 上記獣婚譚の意味するもの

熊との婚姻によって半人半熊の子供が生まれる(しかも妊娠六ヶ月以内で生まれてしまっている)ような今日の科学では考えられないような話が「事件」または「史実」として歴史記録に残されることはしばしば見られる。中国の歴史書やその影響下に成立した史書には、帝王の誕生について神話めいた逸話を入れるのは常套手段である。また、漢化していない人々について、その神話、伝説めいた挿話を載せるのも珍しいことではない。したがって、獣婚譚が時間まで明示された「事件」、「史実」として記述されていても驚くに値しない。重要なのは、前述のように後に清帝国の中枢を占める人物まで輩出することになる兀狄哈の人々の間で熊と人間の女性との性交渉、その結果としての半人半獣の子供の誕生が、世宗20年(西暦では1437年)の5月から11月と時間を明示された「事実」として人々の口にのぼり、しかも女直としての血統は兀狄哈よりもはるかに高いとされ、漢化も進んでいる斡朵里(建州女直)の指導者までがまことしやかにその噂を語るということである。

熊が人間の女性と性交渉を行い子供を出産させることができるということが事実として信じられているということは、とりもなおさず、熊が人間と同格の存在、言い方を変えれば、その独自の生物分類における同じ「種」であると考えられていることを表す。そのような考え方は熊に関する儀礼を擁する北方狩猟民に広く行き渡っているもので、今日の民族学ではこのような熊に関する考え方、態度は北方狩猟民的文化要素の一つと考えられている。現在それを残しているのはいずれも北方森林(タイガ)での狩猟採集活動に自らの生活をかけている人々である。

15世紀の兀狄哈の居住地に最も近い地域でそのような熊に関する考え方を近年まで保持していたのはアムール川流域の諸民族である。アムール、オビなど大河川流域の人々は漁撈活動が生業の中心を占めるため、狩猟採集に生活の全てがかかるわけではない。しかし、森林での狩猟採集も欠かせない活動であり、熊の住む森とは浅からぬ因縁をもつ。アムール地域にはウリチ、ニヴヒ(ギリヤーク)、アイヌなど、仔熊を捕らえて、数年育て上げ、それを殺して神の国の使者として送り返す特異な儀礼を行う人々がある。アイヌの場合は少し異なるが、ニヴヒとウリチでは熊は森(または山)の世界の「人」であり、その世界にも氏族があり、法があり、村の人と同様の生活をしているという考え方がみられる。

同様に熊を「人」あるいはかつて「人」であったとする考え方はニヴヒ、ウリチらより上流に住むオロチ、ウデヘ、ナナイなど飼育熊儀礼を行わない人々の間にも広まっている。彼らはまた、熊が祖先であるという考え方も持っている。彼らの場合は森や山で狩った熊を対象に儀礼が行われるが、それは祖先と一体化する

という意味があるともいわれる。文化史的な観点からみれば、ニヴヒらの飼い熊儀礼は狩猟による山熊儀礼の伝統の上に動物を飼育する文化が重なって成立したといわれる。熊を森または山の「人」とみなす考え方は飼い熊儀礼でも山熊儀礼の場合でも共通である。

上記の兀狄哈の生活状態に関する記録にみられるように、兀狄哈の生活は基本的には農耕、牧畜を主体としていた。しかも彼らの経済状態は、指導者の女直内でのステータスも高く、漢化も進んでいた斡朶里 Odoli すなわち建州左衛の女直よりもよく、穀物、家畜も豊富であった。しかし、鹿や毛皮獣をねらう狩猟活動も健在であり、また女性が熊に襲われたのが山へ白樺の樹皮を剥ぎに行ったことがそもその原因であったことに現れているように、山や森での植物採集も欠かせない仕事であった。白樺樹皮は北方狩猟民の生活に欠かせぬ生活材であるが、兀狄哈にもそれで生活用具（食糧を入れる容器の類など）を作る伝統があったということになろう。つまり、狩猟、採集の場としての森は身近なものであり、彼らの生活圏の中でも重要な位置を占めていた。森と密接に結びつく熊が「森の人」という形で人間と「同種」とみなされる考え方が残っていても不思議ではない。社会集団としては清帝国を築いた満州人に連なる系譜の上にあり、しかも農耕、牧畜を主体とする生業体系を持つ15世紀、16世紀の「兀狄哈」という集団に、熊を人と同種と見る考え方があったということは、彼らにも文化的には北方の森林狩猟民の系譜とも連なる文化伝統があったということの意味する。

5. 兀狄哈の北方狩猟民的文化要素の変容

2. でも触れたように、15、16世紀の兀狄哈諸集団はすべて16世紀末期から17世紀はじめにはヌルハチに率いられた女直達から「ウェジ部」Weji i aiman と呼ばれ、その徙民政策によって征討を受けて満州八旗に組み込まれていく。それはまた、兀狄哈の人々が清朝を築いた「満州民族」の形成に参加していたことを意味する。では兀狄哈が満州になる過程で獣婚譚に代表される北方狩猟民的文化要素はどのようになったのであろうか。

16世紀末期以降のウェジ部についてはその徙民過程に関する記録は多く残されているが、その文化に関する記録は少ない。恐らく16世紀の混乱の時代の中で朝鮮史料にいう忽刺温、斡朶里、兀良哈、兀狄哈らは抗争、対立を続けていたようであるが、朝鮮、忽刺温、斡朶里といった漢人文化の影響の強い人々と接触を重ねることによって徐々に北方狩猟民的な要素は失われていったことが推察される。そして、ヌルハチの徙民が始まると多くの住民が八旗の一員としてこの地方を去っていく。

その後、牡丹江流域は東北満州の要衝として重要視される。例えば、遅くとも1630年代には尼麻車兀狄哈の根拠地のすぐ北にある寧古塔 Ningguta が東北満州の中心地となり、松花江下流から烏蘇里江、アムール川流域の住民の朝貢を受ける場所に指定されている。そして、1653年には東北満州の指令官である昂邦章京 amban janggin (後の将軍) が駐屯するようになり、松花江、烏蘇里江からアムール川下流域、サハリンまでの住民を統括する一大拠点となった。そのために、満州各地から駐屯してきた八旗の人々が集まるようになり、寧古塔の周辺のかつての兀狄哈の地は満州人の居住地となる。

かつての兀狄哈の仲間で17世紀以降も満州と区別されていたのが都骨兀狄哈の後裔といわれるフルハ部である。17世紀後半の状況が記された『柳邊紀略』、『寧古塔紀略』などでは、フルハ部の人々が松花江、アムール川のさらに下流の「黒金」または「黒斤」（両者とも Heje の当て字、「赫哲」とも書く）、「飛牙喀」または「非牙哈」（両者とも Fiyaka の当て字）らと同類として扱われている。それは清朝からみれば、「辺民」と

呼ばれる毛皮貢納民として同格とみなされたからである。そして、フルハ部が1670年代から始まった新満州八旗の編成によってようやく他の満州人と同じ生活を始めるようになった様子が描かれている。例えば、『柳邊紀略』では当初魚皮を衣服としていたのが（それでフルハから赫哲にかけては「魚皮韃子」と呼ばれた）、17世紀末期には満州人と同じ衣冠をつけるようになったと記されている。そのような満州化または漢化の過程の中で、熊を人と同種に考える北方狩猟民的な要素は影を潜めていったと思われる。しかし、沿海州南部のワルカ部（「兀良哈」Orangkai）に由来し、清朝時代三姓駐防の佐領を担った Shummuru hala に貂神をまつる習俗が見られるなど、北方狩猟民的な要素の中には満州民族の一部となった後も痕跡の形で残されていたものもあった。

6. 結 論

本報告で紹介した15世紀の兀狄哈の由来についてはまだ不明の点が多い。恐らく12、13世紀頃の『金史』、『元史』あたりにも登場するので、その頃からいたことは分かる。ただし、兀狄哈 Udikai はしばしば指摘されるように Udi が森を意味するところから、「森の民」を意味し、必ずしも特定の住民を指す訳ではない。しかし、「民族」というものを自ら「民族」とであると主張することによって成立する社会集団であるとするならば、15世紀以降の『李朝実録』に登場する「兀狄哈」は「兀狄哈人」と称する「民族」といえるかもしれない。というのは、彼らは尼麻車、都骨などいくつかの下位集団が連合して周辺の斡朵里や忽刺温、兀良哈らと対抗していたが、そこには「一つの勢力に属している」という共属意識と「自分達は斡朵里や忽刺温、兀良哈らとは違う」という他から区別する意識があったに相違ないからである。

この「兀狄哈」と呼ばれる「民族」の持つ文化要素の一つとして人と熊とが同種のカテゴリーに入れることができ、その間には子供さえ生まれるという観念があった。それは現在の同じ観念の分布状況から「北方狩猟民的文化要素」の一つに数え上げることができることから、兀狄哈には北方狩猟民的な文化的系譜を引く文化要素もあったといえるのである。そして、その系譜は17世紀以降、満州民族の形成に参加することによって彼らの間では消滅し、また兀狄哈という民族自身も満州という新しい民族の中に埋没していくことになる。

しかし、兀狄哈が農耕をやりながらも狩猟、採集が盛んで、熊と人とが同種であるという「北方狩猟民的文化要素」をもった「民族」であるからといって、従来言われてきたように兀狄哈が「赫哲」（これは19世紀に松花江下流域にいた民族、普通同じ時期にアムール川下流域にいたゴリド Gold またはナナイ Nanai と呼ばれた民族と同じであるとされる）であるまたは「赫哲」に連なると言うのは間違いである。いかにともによく似た北方狩猟民的な文化要素を持ち、類似の形の家屋に住み、漁撈、狩猟、採集の諸活動と農耕、牧畜とが併存する生業形態を共に持っていても、兀狄哈＝赫哲／ナナイということはできない。赫哲またはナナイという「民族」の成立はきわめて新しく、恐らく新満州八旗の編成作業が終わる18世紀初め以前ではありえない。然るに兀狄哈は17世紀前半には満州に包含されている。時代的に重ならないのである。

また、文化複合に類似性があるからと言って由来、起源を同じくする民族であるとも言えない。文化複合の類似は生態系の類似や民族間の接触によっても起こり得るからである。由来、起源を同じくすることを証明するためには言語系統を厳密にたどるか、民族を構成する下位集団（例えば hala など）に共通のものがあなどのことが証明されねばならない。しかし、19世紀末期にみられた赫哲、ナナイの hala の構成には17世紀のフルハ部の一部は含まれるが、15世紀の兀狄哈の下位組織の末裔とおぼしきものは今のところまだ見つ

かっていない。松花江下流域にいた兀狄哈（都骨兀狄哈に代表される集団）はフルハ部を通じてかろうじて赫哲に連なる可能性もあるが、そのほかは全て満州人を形成したのである。

したがって、本報告では熊が森または山の「人」であるという観念が15世紀までは農耕、牧畜民であった牡丹江流域の住民にまで残されていたこと、しかし、その地域の住民が満州民族の形成に参画したことで、そのような観念が薄れ、17世紀中にその分布が松花江下流域より東のアムール川流域、またはシホテ・アリンの山岳地帯に後退したこと、そして清朝の基礎を築いた満州人にもかつて北方の狩猟に基づく文化伝統を持っていた人々が、かなり有力な要素として入っていることを指摘して終わりにしたい。

〈文 献〉

学習院大学東洋文化研究所編 1956 『李朝実録』第九冊、学習院大学東洋文化研究所

1958 『李朝実録』第一八冊、学習院大学東洋文化研究所

河内 良弘 1971 「明代東北アジアの貂皮貿易」、『東洋史研究』第30巻1号

1975 「明代兀者衛に関する研究」、『史林』58巻1号、京都大学文学部史学研究会

1978 「明代野人女直阿速江衛について」、内田吟風博士頌寿記念会編『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』、同朋舎、京都

Kurshanov, A. I. red 1989 *Istoriya i kul'tura Udegeitsev*, Leningrad

遼寧省図書館古籍部整理 1989 『八旗満州氏族通譜』（影印本）、遼瀋書社、瀋陽

遼 東 志 1985 「遼東志」、『影印遼海叢書』一、遼瀋書社、瀋陽

増井 寛也 1986 「新満州ニル編成前後の東海フルガ部一特に種族問題を中心として一」、『立命館文学』10月、11月、12月合併号

松浦 茂 1987 「清朝辺民制度の成立」、『史林』70巻4号、京都大学文学部史学研究会

三田村泰助 1965 『清朝前史の研究』、京都大学文学部東洋史研究会

呉 振 臣 1968 「寧古塔紀略」、『清朝藩屬輿地叢書』十五、廣文書局

楊 賓 編 1985 「柳邊紀略」、『影印遼海叢書』一、遼瀋書社、瀋陽

Summary

In this brief paper I will examine an occurrence which was recorded in the official chronicles of the Korean Yi Dynasty (『李朝実録』) in the 15th century from the view point of cultural history of the peoples of north-eastern Manchuria. It has much to do with their world view, above all, with their bear worship.

The occurrence is written as follows:

“*Udikai* women usually adorned themselves with small bells. One day, in May 1437, three girls went to mountains to strip a birch. Though one girl safely came back home, the others were lost. When one hunter went to the mountains to hunt in that November, he shot a bear and heard bells ringing in a cave of a tree. He cut it down and found the girls holding their children. Answering his question, they said that they had met a male bear when they had got lost in the forest. The bear had threatened them to be his wives and they had got the children. The face of the children resembled that of a bear. The hunter

killed them and took the girls back home.” (in July 1438)

The *Udikai*, which was recorded in the Korean chronicles in the 15th and 16th centuries, was one of the ethnic or territorial groups of the north-eastern Manchuria. Their main territory was on the basin of Mudanjiang (牡丹江) and Doumanjiang (豆満江). They seem to have spoken in one of Tungus-Manchurian languages, but details of their language and culture are still unknown. Though the Chinese and Korean people frequently described them in their documents, as if they were uncivilized people, they were by no means hunter-gatherers, but cultivators and traders. They were engaged in growing various crops and fur trading. In fact, they had large economic and military power, and often won the battles with the Koreans in the 16th century.

However, it is true that they had some cultural traits characteristic of hunter-gatherers. As is described in the above mentioned document, they were also engaged in hunting and gathering. Bear hunting and birch bark working are, as it were, the symbol of the culture of northern hunter-gatherers. Above all, one must pay much attention to the fact that the *Udikai* people believed that a bear was the same creature as a human being and that it could marry human male or female. They recognized the occurrence as a real fact, not as a fiction. Such a belief or recognition is popular among the peoples of Siberia and Russian Far East.

Except the traits characteristic of hunter-gatherers, their costumes and ornaments also resemble those of the peoples of Russian Far East. The above document says that the *Udikai* women usually adorned themselves with small bells. It means that they attached bells or small metal chips on their women's clothes. Such ornaments are found among the peoples of Lower Amur and Russian Primor'ya written in some Chinese historical documents in the 18th and 19th centuries, and are now also very popular among them. Though any documentary evidence has still never been found, the *Udikai* people shared some common cultural traits with surrounding northern hunter-gatherers in the 15th and 16th centuries.

Resemblance between the name *Udikai* and the name of the present ethnic group *Udehe* is also noteworthy. Both names share a common root : *Udi* or *Ude* means a forest or a taiga in Tungus-Manchurian languages. They implies the forest people or the forest dwellers. However, it is impossible to find any genealogical relations between the *Udikai* and the modern *Udehe*. According to the documents of the Qing dynasty (清朝), the most of the *Udikai* people took part in the Manchurian military organizations in the 17th century and, as a result, were included in the Manchurian people. Some emigrated to Korea and submitted to the Yi dynasty. They gave up their homelands and many traditional cultural traits. Descriptions about the bear worship of the *Udikai* or their offsprings have never been found in any historical documents since the 17th century.

Though they had shared some common cultural traits with surrounding northern hunter-gatherers up to the 16th century, they thoroughly abandoned them in the 17th century and were subject to their historical destiny to be a member of the Manchurian people.